【国指定史跡】

新田荘遺跡

新田荘の成立と発展

新田荘が成立したのは平安時代の末期で、「治天の君」とうたわれた鳥羽法皇の院政期にあたります。

荘園が成立した当時、現在の群馬県南東部、旧新田郡地域は、天仁元年（1108）の浅間山の大噴火によって荒廃しておりました。この地域では５～10cmの降灰の堆積層（浅間Ｂテフラ）が確認されています。当時はその約３倍の降灰量があったと考えられており、被害の大きさが窺えます。こうした荒廃地は、律令制の下では再開発することによって耕作地化が可能であった「空閑地」とされ、新田義重がこの地域の荒廃地の再開発をなし、成立したのが、新田荘です。

新田荘の成立の契機は、久寿元年（1154）の鳥羽法皇最後の御願寺である金剛心院の造営に関係すると考えられます。それは、義重が仁平３年（1153）に内舎人に任命され、この年には金剛心院の造営が始まり、その造営を請け負った藤原家明と、上野介に就任した藤原重家、さらには領家藤原忠雅、そして平清盛の子重盛が姻戚関係にあるなど、金剛心院の造営を柱として、すべての人脈が結びつくからです。このため、新田荘は金剛心院の造営当初に寄進され、荘園として成立したものと考えられるようになってきています。

新田荘の存在を示す初出資料は、保元２年（1157）の「左衛門督家政所下文」（由良家文書）です。新田義重は、「空閑地」を開発して形成した私領（公領・荘園体制下で成立した私的支配権の土地）の支配権を確固たるものとするため、領家である花山院藤原忠雅に寄進し、さらに忠雅はこれを本家である金剛心院に寄進しています。これにより、左衛門督家が新田義重を新田荘の下司職に任じたのが、この下文です。正式に義重が現地での支配権を認められたのです。

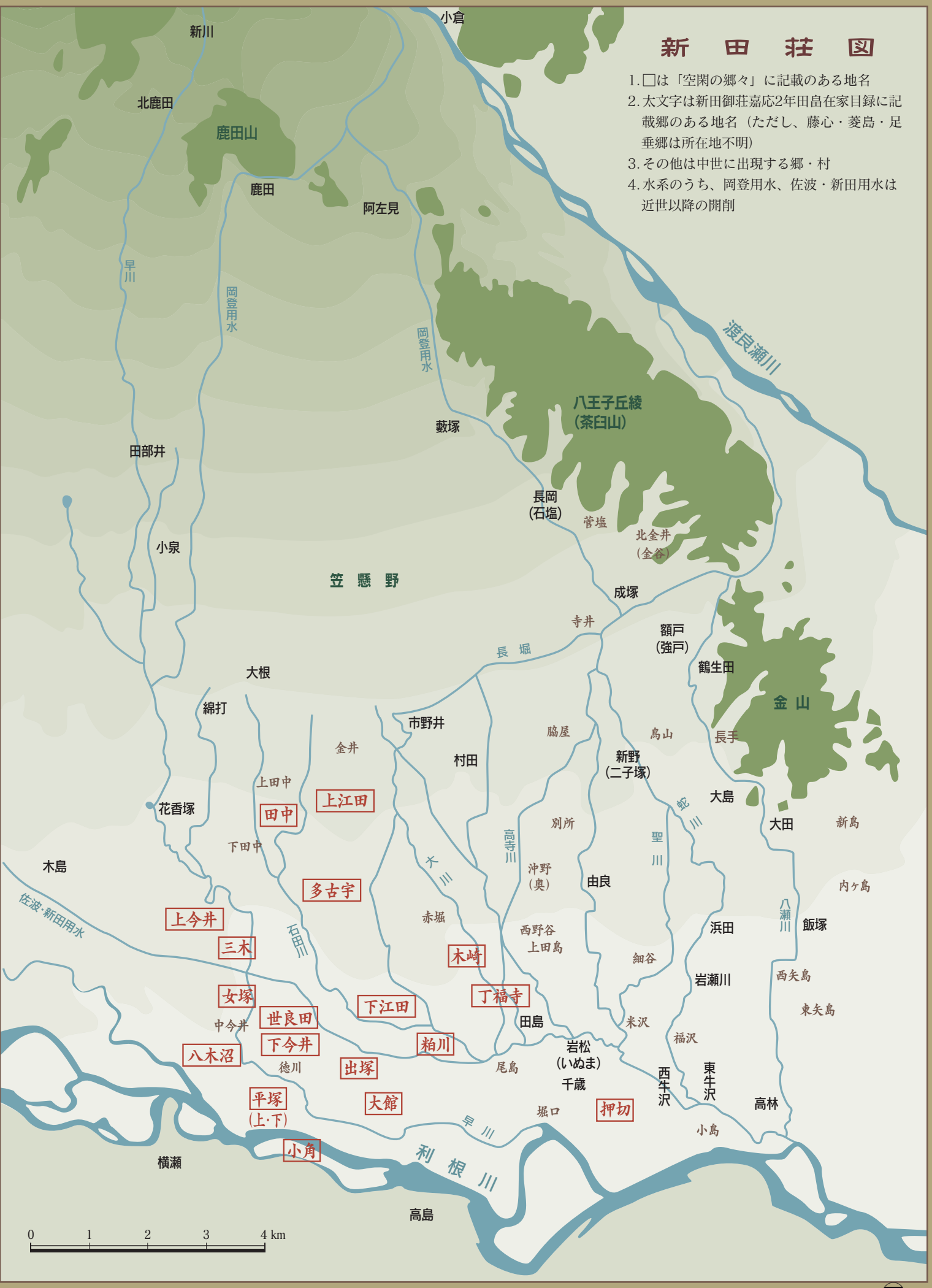
では、新田荘が成立した当時の開発私領はどの程度の規模であったのでしょうか。確固たる領域を示す資料はありませんが、仁安３年（1168）の「新田義重譲状」と「新田義重置文」によって領域を考えて見ましょう。その領域は、義重が「らいわうこせん（頼王御前）」の母のことを大切に思い、譲ったとされる「空閑の郷々」19郷で、その内の６郷が「らいわうこせん」に譲られています。19郷は、新田荘図に示したとおりで、現在、この19郷が開発私領と考えられています。

ところが、早くも嘉応２年（1170）には、荘域は新田郡全域へと拡大されてきます。そのことを示す「新田御荘嘉応２年目録」には、新たに37郷が記されています（女塚・今井郷が重複）。このほか義重が開発した私領19郷も荘域に含まれていたと考えられますので、嘉応２年当時の56郷が拡大した新田荘の全体像で、それは新田荘図に示したとおりとなります。その規模は、田300余町、畠96町余、在家（公領・荘園体制下における住屋と付属耕地を一体とした在家役賦課の対象）248宇でした（目録記載分）。

短期間に荘園を拡大できた背景には、領家藤原忠雅の力が介在しています。忠雅は、平治の乱（1159年）後、絶大な力を有した平清盛の娘を子息兼雅の嫁に迎え、自らは仁安３年（1168）に太政大臣に就任しています。このように平氏の力と、公的地位を背景として、嘉応２年に上野介藤原範季を動かして公領部分の荘園化をも図り、荘園を拡大していったのです。

ここに新田郡という一郡規模の荘園を確立した義重は、隣接する園田御厨司など秀郷流藤原諸氏と競合しながらも、この地に確固たる基盤を築き、子息たちに所領を譲って荘内に配置し、新田氏一族発展の基礎を築き上げたのです。

浅間山の噴火（1108年）による火山灰（浅間Ｂテフラ）で埋もれた水田址（太田市大島町前沖遺跡／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団提供）


新田荘図
1.□は「空閑の郷々」に記載のある地名
2.太文字は新田御荘嘉応2年田畠在家目録に記載郷のある地名（ただし、藤心・菱島・足垂郷は所在地不明）
3.その他は中世に出現する郷・村
4.水系のうち、岡登用水、佐波・新田用水は近世以降の開削
小倉
新川
北鹿田
鹿田山
鹿田
阿左見
早川
岡登用水
岡登用水
渡良瀬川
八王子丘陵
（茶臼山）
藪塚
田部井
長岡
（石塩）
菅塩
北金井
（金谷）
小泉
笠懸野
成塚
寺井
額戸
（強戸）
長堀
鶴生田
大根
金山
綿打
市野井
脇屋
鳥山
長手
金井
村田
新野
（二子塚）
上田中
上江田
大島
花香塚
田中
蛇川
大田
新島
別所
高寺川
聖川
下田中
木島
ケ川
沖野
（奥）
由良
内ケ島
多古宇
佐波・新田用水
上今井
赤堀
八瀬川
飯塚
石田川
西野谷
上田島
浜田
三木
木崎
細谷
岩瀬川
西矢島
女塚
丁福寺
下江田
東矢島
世良田
中今井
田島
米沢
福沢
下今井
粕川
八木沼
岩松
（いぬま）
徳川
出塚
尾島
西牛沢
東牛沢
千歳
平塚
（上・下）
大館
押切
高林
堀口
早川
小島
小角
利根川
横瀬
高島
0
1
2
3
4 km

新田荘の人々

新田義重から始まった新田氏の一族は、新田荘の各地に館を構え、それぞれの郷村名を名乗り、支配を行いました（下記系図参照）。義重は、子を山名（高崎市）、里見（高崎市）にも配して勢力を広げています。なお、義重の子で長楽寺を開いた徳川（得川）義季（世良田義季）は、後に、江戸幕府を開いた家康が、その子孫であるとして徳川氏を名乗ったため、始祖として崇められました。

新田氏第４代の新田政義は、由良郷別所（別所町）に円福寺を開きました。第６代新田基氏の墓を含む20基余りの墓石が、この寺の境内に存在しています（伝新田氏累代の墓）。

第８代が新田義貞で、元弘３年（1333）に弟の脇屋義助ら新田氏一族とともに生品神社で挙兵し、鎌倉幕府を討幕したことは余りにも有名です。義貞がその後戦うこととなった足利尊氏は、新田義重の弟足利義康（あしかがよしやす）に始まる足利氏のやはり第８代です。

また、新田氏第２代新田義兼（よしかね）の娘と足利氏第２代足利義兼（よしかね）の子義純（よしずみ）との間の子が岩松時兼（ときかね）（岩松氏初代）で、戦国時代の金山城主岩松家純（いえずみ）はその子孫となります。ちなみに、岩松氏の子孫新田俊純は幕末に新田氏一族の棟梁として新田官軍を率いて討幕運動に加わり、明治16年（1883）には男爵（だんしゃく）に列せられています。

源姓　新田・足利系図

暮らしと信仰

調　理

東国には「囲炉裏文化」が発達しました。出土する調理用具の特徴をみると、囲炉裏が調理の中心であったことがわかります。また、穀物を粉にひく「粉の食文化」が発達した時代でもあり、長楽寺の住職義哲が書いた『永禄日記』(永禄8年・1565）には、「麺子」、「椀麺」、「入麺（煮麺）」、「碁子麺」を食べたと記されています。

鉄鍋（世良田町上新田遺跡出土：室町時代/県立歴史博物館提供）
鋳鉄製の深鍋は、武器生産による鉄の不足から、安価な軟質陶器製の土鍋に、とって代わられました。

土鍋（世良田町地内井戸址出土：室町時代）
軟質陶器であり、縁部内側に耳（囲炉裏に吊すための吊り手）をもつことから「内耳土鍋」と呼ばれます。煮物用に使われた深鍋で、14世紀後半頃から、鉄製の鍋を模して作られるようになり、鉄鍋より安価なため一般にも広く普及しました。

土釜（世良田町地内井戸址出土：室町時代）
囲炉裏に吊して湯を沸かしていたもので、外側に炎除けの鍔を付けた吊り手をもっています。

食　膳

食膳に並ぶ食器は木製（白木）のものが一般的でしたが、13世紀以降、東日本では渋下地漆器が量産され、漆椀が有力農民層にも普及しました。また、椀や小皿を主に漆絵も加飾されるようになりました。一方、酒杯には「カワラケ」と呼ばれる素焼き土器が引き続き使われていました。

小皿（世良田町世良田諏訪下遺跡出土：14世紀前半）
右の小皿は、柿渋を用い漆塗りの製作工程を簡略化した渋下地漆器で、左の小皿は、白木づくりです。

杓子（世良田町長楽寺：室町時代）
これは長楽寺宝物の一つで、仕上げに赤漆を塗っています。仏前に供えるご飯を飯斗（おひつ）に盛るのに使ったと考えられます。

履　物

草履（世良田町世良田諏訪下遺跡出土：14世紀前半）
「板金剛」とよばれる草履の芯材とした板です。板は、縦に２分割されたもので、稲藁や藺草を編み込んでとめ、左右両端の切り込み部に緒をまわし、草履（ツッカケ）としました。12世紀末～16世紀にかけて使用された中世の履物ですが、下駄のように近代までは伝わりませんでした。

生　業

火山災害で荒廃した土地の再開発には、いかに灌漑を施すか、水利対策の成功が大きな鍵を握っていました。新田荘の開発と荘園拡大の背景には、矢太神水源や重殿水源などの湧水を源とした河川灌漑の整備や、新たな用水堀の開削などが大きく関わっていたと考えられます。

新田荘の生産を助けた当時の農耕具は、古代以来の形態を引き継いだもので、大きく変わってはおりません。鍬や鋤などは、木製本体の先端に鉄製の刃部を差し込む形態のものが使われていました。

鋤先（鉄製/世良田町上新田遺跡出土）
木製本体にはめ込んで使用しました。

斧（鉄製/世良田町上新田遺跡出土／県立歴史博物館提供）
柄が腐らずに、当時のままで出土しためずらしいものです。

貯　蔵

貯蔵には、常滑焼など耐水性の良い陶磁器（大甕など）が使われました。中には、銭を貯めたり、火葬骨を納めて骨壺として利用したものもあります。また、高価な中国輸入陶磁器などは、家宝・寺宝として伝世され、特別な日に、床の間などに飾られました。

古瀬戸合子（新田木崎町地内出土：14世紀前半）
壺の中には「開元通宝」など50枚あまりの古銭（輸入銭）が納められていました。

古瀬戸四耳壺（世良田町長楽寺普光庵跡出土：14世紀前半/県立歴史博物館提供）
長楽寺住職第５世月船琛海の高弟の遺骨を納めるため、骨蔵器として転用されたものです。

信　仰

武家社会が成立した中世は、必ずしも平穏な世ではありませんでした。戦乱が相次ぎ、飢饉や疫病も幾度となく襲い、人々は不安な日々を送らなければなりませんでした。このような世相を背景に、仏教が一般民衆へも浸透し、東毛地域には、平安密教系の天台宗が先に広まり、浄土宗・時宗・真言宗・臨済宗なども相次いで展開しました。しかし、民衆は宗派にこだわることなく、観音・薬師・阿弥陀・地蔵などを信仰し、「南無阿弥陀仏」や「南無大日如来」をただひたすら唱え、現世の安穏と極楽往生を祈りました。

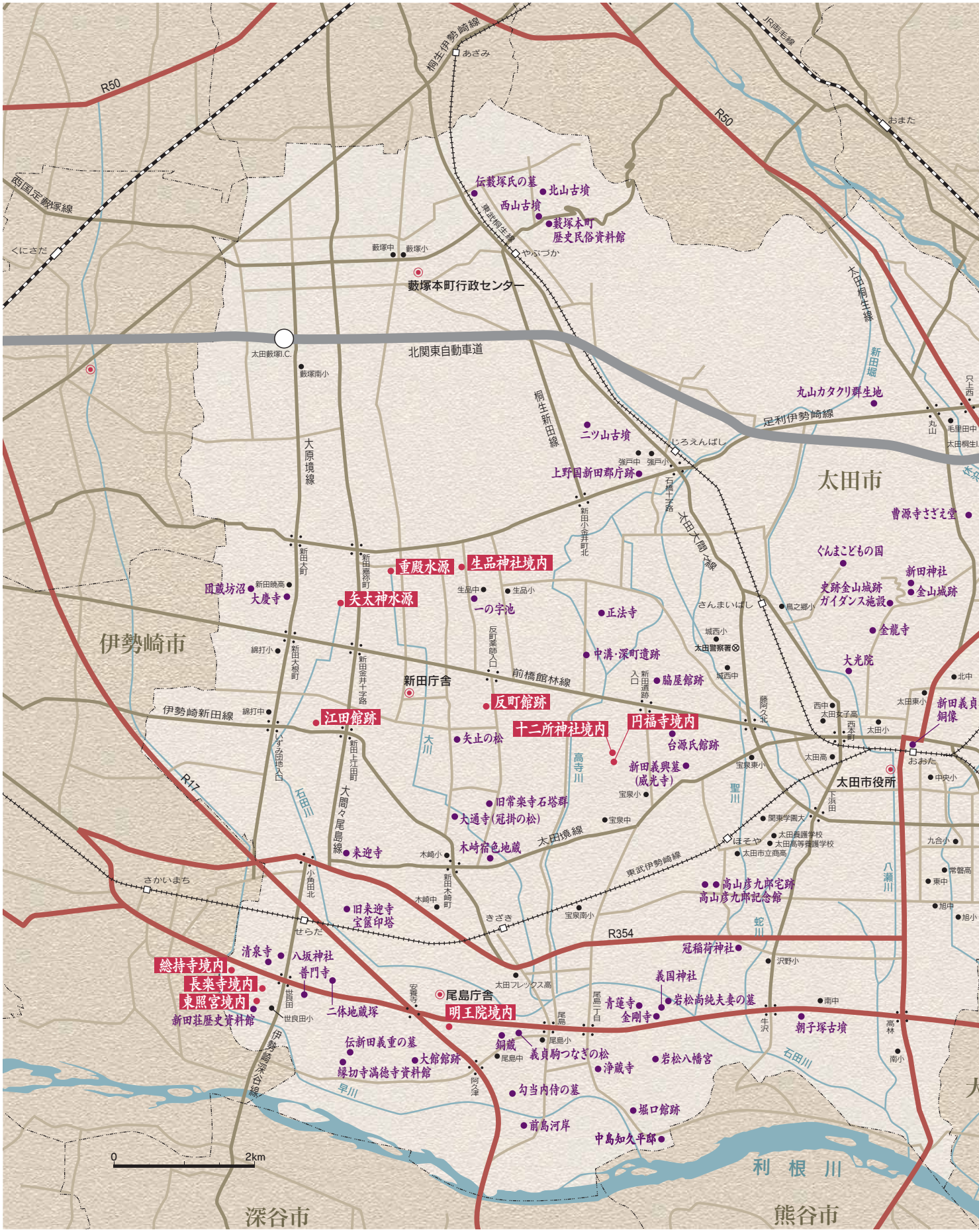
笹塔婆（世良田町世良田諏訪下遺跡出土：14世紀前半）
塔婆を薄くし小型化したようなもので、経木塔婆または片木塔婆ともよばれます。長さは23～48㎝とばらつきがありますが、表面には、「南無大日如来」（78点）、「南無阿弥陀仏」（10点）、「南無妙法蓮華経」（２点）と墨書きされたものや、梵字のみ（40点）が書かれたものがありました。

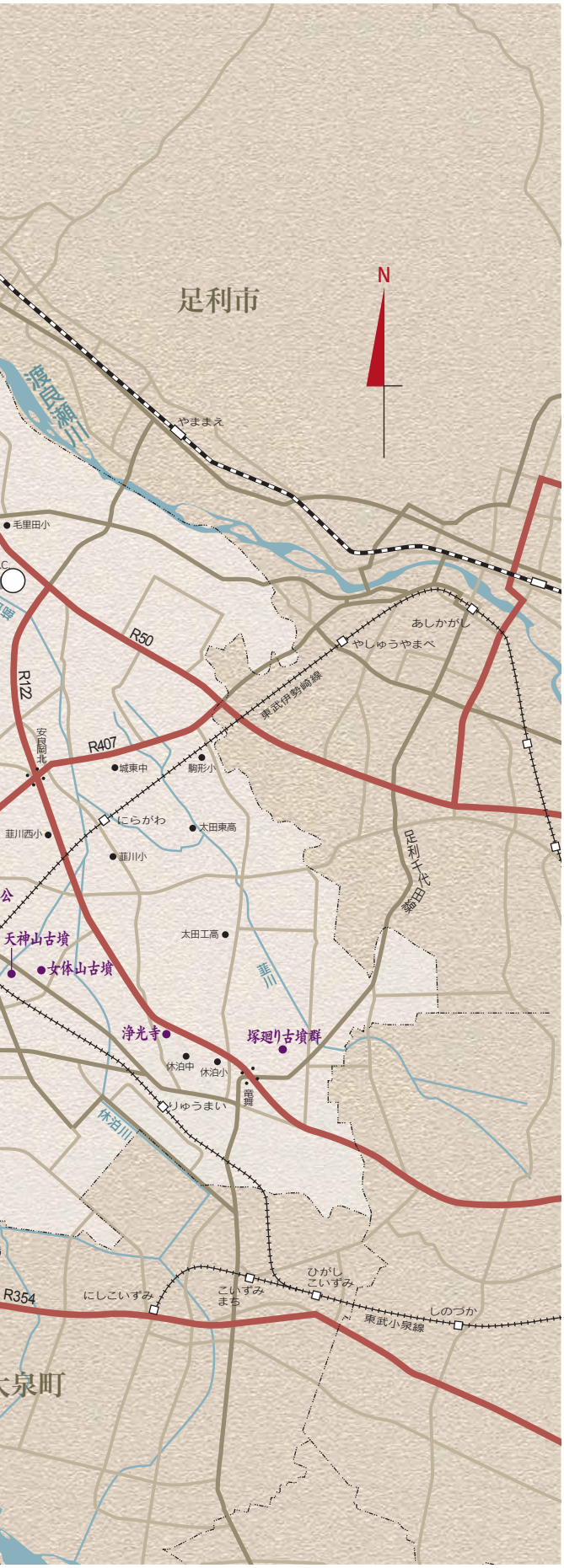
おそらく、世良田宿で行われた仏教的な行事の際に、堀に流したものではないかと考えられます。塔婆は、死者の霊の依代とされています。水をかけたり、川に流したりするのは、現世の罪や汚れを浄め、得脱往生を祈願し行うものです。民衆の祈りを知る貴重な資料となっています。

板碑（岩松町金剛寺：14世紀前半）
金剛寺に伝わる２基の板碑の一つです。石材には緑泥片岩（秩父青石）を使用しています。陰刻された銘文から、比丘尼妙蓮が、生前に、極楽浄土を祈願して正和４年（1315）８月に造立したことがわかります。

板碑は、一般的に供養のために造立したと考えられていましたが、このように、生前において、現世と来世の安穏・極楽を祈り造立することもあったのです。

新田荘遺跡案内図


伊勢崎市
太田市
深谷市
熊谷市
利根川
北関東自動車道
太田藪塚I.C.
藪塚本町行政センター
伝藪塚氏の墓
北山古墳
西山古墳
藪塚本町
歴史民俗資料館
二ツ山古墳
上野国新田郡庁跡
丸山カタクリ群生地
曹源寺さざえ堂
ぐんまこどもの国
新田神社
金山城跡
史跡金山城跡
ガイダンス施設
金龍寺
大光院
新田義貞
銅像
重殿水源
生品神社境内
矢太神水源
団蔵坊沼
大慶寺
一の宇池
正法寺
中溝・深町遺跡
脇屋館跡
新田庁舎
反町館跡
江田館跡
矢止の松
十二所神社境内
円福寺境内
台源氏館跡
新田義興墓
(威光寺)
旧常楽寺石塔群
大通寺(冠掛の松)
来迎寺
木崎宿色地蔵
旧来迎寺
宝篋印塔
高山彦九郎宅跡
高山彦九郎記念館
冠稲荷神社
義国神社
岩松尚純夫妻の墓
朝子塚古墳
総持寺境内
長楽寺境内
東照宮境内
新田荘歴史資料館
清泉寺
八坂神社
善門寺
二体地蔵塚
尾島庁舎
明王院境内
青蓮寺
金剛寺
伝新田義重の墓
大館館跡
縁切寺満徳寺資料館
銅蔵
義貞駒つなぎの松
浄蔵寺
岩松八幡宮
勾当内侍の墓
堀口館跡
前島河岸
中島知久平郎
太田市役所
太田市警察署
0
2km



新　田　荘　事　績　年　譜

1106. 7　新田氏の祖義重の祖父源義家、没す。
1108. 7　浅間山大噴火。降灰により甚大な被害を受ける。
1135　この頃、新田義重生まれる。
1150　この年、義重の父義国、右大将藤原実能邸を焼き払った咎により、勅勘を被り足利の別業に篭居する。
1153. 1　義重、内舎人に任命される。
1154. 8　鳥羽法皇最後の御願寺である京都の金剛心院、造営される。この頃、新田荘成立する。その区域は、市域南西部の早川・石田川の下流域で、「空閑の郷々」と呼ばれた19郷と考えられている。
1155. 6　義国、没する。この頃、岩松青蓮寺建立されると伝う。
1157. 3　義重、左衛門督藤原忠雅より、新田荘下司職に任命される。
1159. 1　義重、大炊介に任命される。
1161~63　この頃、妙満（義重娘）、源義平の菩提を弔うため、清泉寺を建立する。
1168. 1　義重、従五位下に叙任される。
6　義重、子息「らいわうこせん（義季）」の母に19郷を、その内6郷を「らいわうこせん」に譲る。この年、義重、岩松八幡宮を勧請するという。
1170　新田御荘田畠在家目録できる。新田荘、旧新田郡全域に拡大する。
1172. 4　義重、子息義兼に所領を譲る。
1180. 9　義重、はじめは源頼朝の出兵依頼に応じず寺尾城に籠もる。
12　義重、頼朝に帰属する。
1185.10　義重の惣領義兼、頼朝の御家人役を務める。以後、『吾妻鏡』に義兼の御家人役勤仕の記事が、数回見られる。
1187. 3　義重、祥寿院（現東今泉町曹源寺）を建立と伝える。
1193. 4　頼朝、信濃巻狩の帰路、義重の寺尾館に立ち寄る。
1202. 1　義重、没する（68歳）。
1221. 9　義重の子息義季、長楽寺（世良田町）を創建し、僧栄朝を招き開山する。
1241. 4　新田氏4代政義、囚人逐電過怠料として大仏殿（鎌倉高徳寺）造営料の寄進を命じられる。
1244. 6　政義、京都大番役勤仕中に出家し、所領を没収される。後、政義、由良郷別所（別所町）に塾居して円福寺を開き、仁和寺より静亀を招いて開山とするという。
1259.10　阿闍梨静亀、別所十二所神社に木造神像を造立する。
1272　この年、世良田頼氏、勘気を被り佐渡に流される。
1276.12　長楽寺第3世院豪、石造宝塔を境内文殊山に造立する。
1300　新田義貞、この頃生まれる。
1318.10　義貞、新田荘八木沼郷内の在家・畠地を由良景長妻紀氏に売り渡す（義貞の初見資料）。
1322.10　大館宗氏と岩松政経が、「一井郷沼水」の水利権を巡って争った鎌倉幕府の裁許状が発せられる。この「一井郷沼水」が、重殿水源と考えられる。
1324. 6　円福寺（別所町）に「沙弥道義（新田基氏）七十二逝去」銘の五輪塔が造立される。
1333. 1　幕府派遣の楠木氏追討軍中に、義貞ら新田氏一族の名が見える。
3　義貞、後醍醐天皇の幕府討幕の綸旨を受け、追討軍を抜けて上野国に帰る。
義貞、幕府の徴税使黒沼彦四郎入道を世良田に斬首する（二体地蔵塚）。
5　義貞、生品明神（新田市野井町）で幕府追討の兵を挙げる。
義貞、北条高時らを鎌倉東勝寺に滅ぼす（鎌倉幕府討幕）。
1335. 7　岩松経家、北条時行の軍勢と武蔵国女影原に戦い、敗死する。
9~足利尊氏、東国の新田氏の所領を没収する。
10　尊氏、義貞の誅伐を後醍醐天皇に奏上する。
10　義貞、尊氏・直義の追討を奏上する。
11　義貞、尊氏追討のため、鎌倉に向かう。
12　義貞、竹ノ下の合戦に敗れ、京都に戻る。
1336. 1　義貞、京都市中で尊氏と戦う（第1次京都合戦）。
5　尊氏、新田義貞・楠木正成軍を播磨国に敗る。
8　義貞、京都市中へ攻め入るも敗れ、比叡山に退く（第2次京都合戦）。
10　義貞、恒良親王・尊良親王を奉じて越前に下る。
1337. 3　義貞らの拠る金ケ崎城落ちる。義貞らは杣山城へ逃げ落ちるも、子息義顕は討ち死にする。
1338. 2　義貞・脇屋義助ら、越前国府を攻略する。
閏7　義貞、越前藤島荘燈明寺畷で討ち死にする（38歳）。
1342. 4　義助、西国の大将に任じられて、伊予国今張浦に到着するも、翌5月国府（今治市）で病没する（42歳）。安養寺町明王院に義助供養板碑が所在する。
9　大館氏明、伊予国世田山城で討ち死にする。
1358.10　義貞の子息義興、足利基氏に謀られ、武蔵国矢口の渡で自殺する（28歳）。
1417　横瀬貞氏、金龍寺（金山町）を創建と伝える（寺伝）。法灯系譜から考えると、文明年間（1469~86）の創建と思われる。
1438　この頃、岩松家純、幕府から許され、関東に戻る。
1469. 2　金山城築城の地鎮祭が執り行われる。
8　家純、武蔵国五十子陣（本庄市）から金山城に入る。

円福寺境内（えんぷくじけいだい）（太田市別所町）

円福寺は、正式名を御室山金剛院円福寺といいます。古義真言宗の寺で、新田氏第４代の新田政義が開基したと伝えられ、政義が京都御室の仁和寺から招いた阿闍梨静亀が初代住職といわれます。

『吾妻鏡』によれば、政義は寛元２年（1244）京都大番役として在京中、幕府の許可を得ず突然出家したため幕府の咎めを受けて所領を没収され、由良郷別所に蟄居することとなりました。円福寺が開かれたのはその頃と考えられます。

この辺りは、当時「新田荘由良郷」とよばれており、13世紀中頃～14世紀前半頃の新田氏本宗家の拠点になっていたと考えられ、近年改築された本堂には、新田政義、政氏、基氏、朝氏の位牌が安置されています。

境内には、県内第３位の規模を誇る大型の前方後円墳茶臼山古墳が存在し、その前方部東裾には新田氏累代の墓と伝えられる20基余りの凝灰岩製の石層塔・五輪塔群があり、そのうちの一基には元亨四年（1324）に「沙弥道義」（新田義貞の祖父新田基氏の法名といわれる）が72歳で逝去したことが記されています。

また、古墳前方部上には、安山岩製の石幢があり、「宝泉」という地名の由来となった「宝泉禅門」（岩松満国―新田氏一族で、金山城を築城した岩松家純の祖父―の法名）の文字が刻まれています。

円福寺山門

伝新田氏累代の墓

新田荘遺

十二所神社境内（じゅうにしょじんじゃけいだい）（太田市別所町）

十二所神社

十二所神社は、円福寺本堂の西、茶臼山古墳の後円部墳頂近くにあります。創建された時代は不明ですが、中に全部で16体の神像が安置されています。

そのうち５体（市重要文化財）には正元元年（1259）の銘があり、その１体には、前述の円福寺初代住職「阿闍梨静亀」が、現世安穏と極楽往生を祈願して、正元元年10月５日に造像した旨が刻まれています。

平安時代は神仏習合が進み、中世に入ると日本の神々を仏教の如来や菩薩の権現とする考えが一般化し、神殿内に仏を安置し、寺院境内に神々を祀ることが普及しており、ここにもその一端を伺うことができます。

なお、円福寺境内・十二所神社境内を合わせた範囲は、昭和46年に群馬県指定史跡「円福寺茶臼山古墳及び伝新田氏累代の墓附石幢」として指定されていましたが、平成12年、新田荘遺跡として国史跡に指定されました。

神像

総持寺境内（太田市世良田町）

総持寺は、二町四方（一辺約200㍍）の規模を有した惣領家クラスの新田館跡に建てられた寺で、別名を「館の坊」といいます。寺の正式名は、威徳山陀羅尼院総持寺です。寺伝によると正平年間に小俣（足利市）鶏足寺の尊慶の法弟慶範により、岩松八幡宮の別当寺真光寺・世良田町の清泉寺と「館の坊」の三ヵ寺を合わせて一寺とし、真光寺と称しました。その後、第２世慶賢が総持寺と改称したといわれています。

境内地の梵鐘（市重文）は、関東三大祭の一つ世良田祇園の宵宮に、普門寺の梵鐘と呼応して屋台の引きさがりの合図に使用されていました。また、８月１日には義貞様といって伝新田義貞の木像を祀る行事があります。

この新田館跡は、西の早川を背にし、三方を堀にした館跡で、東と南の一部に堀の跡が残っています。居住者は、新田荘の立荘者で、新田一族の始祖である新田義重居館説、本宗家新田政義の失脚後一時期新田氏を代表した世良田頼氏（徳川義季の子）居館説、新田義貞居館説などがあります。

総持寺本堂

伝新田義貞木像

跡　その１

長楽寺境内（太田市世良田町）

長楽寺は、新田氏の祖新田義重の子徳川（世良田）義季（頼王御前）を開基とし、日本臨済宗の祖栄西の高弟栄朝を開山として、承久3年（1221）に創建された「東関最初禅窟」です。寺の正式名は良田山（世良田山）真言院長楽寺といいます。

鎌倉時代は、広大な境内に塔頭子院が軒を並べ、常時500人を超える学僧が、兼学修業に励んだといわれています。室町時代の初期に日本五山十刹の制が成立すると、長楽寺は十刹の第七位となりました。

徳川家康は、天正18年（1590）小田原北条氏討伐の功により、関東の地を与えられました。祖先開基の寺である長楽寺を、天海僧正を住職として復興にあたらせ、寺領100石を与えました。天海は、臨済宗から天台宗に改宗し、境内を整備し、伽藍を修復し、幕府庇護のもとに末寺700有余の大寺院に成長させました。

現在、境内には文珠山の中世石塔群や蓮池、江戸時代の建造物である勅使門（県重文）・三仏堂（県重文）・太鼓門（県重文）・開山堂などがあります。

長楽寺三仏堂

長楽寺文殊山中世石塔群

とうしょうぐうけいだい
東照宮境内 （太田市世良田町）

東照宮拝殿

鉄燈籠

世良田東照宮は、長楽寺住職天海僧正の発願により、日光から長楽寺境内に勧請された神社です。本殿・唐門・拝殿と鉄燈籠は、国指定重要文化財の建造物です。

日光東照宮は、徳川家康の死後２代将軍秀忠によって創建されましたが、寛永13年（1636）３代将軍家光によって、全面的に改築され現在の姿になりました。天海は、社殿の造り替えの際、旧奥社の拝殿と宝塔（現存せず）を、祖先徳川義季が開基した長楽寺の南西部分に移しました。鎮座地はかつての長楽寺の別院真言院であり、閼伽井が真言院の井戸として現在も残っています。正遷宮は寛永21年（1644）10月11日に行われました。幕府は寺領100石に合わせて、神領200石の朱印地を長楽寺に与え、合計300石を領した長楽寺を別当寺として、東照宮の管理と祭祀にあたらせました。社殿等の修理は、幕府によって直接行われました。明治8年(1875)神仏分離令によって長楽寺から独立しました。

境内には、長楽寺第５世住持月船琛海の塔所である普光庵跡があり、月船とともに弟子６人も葬られていた普同塔であることが確認されています。

新田荘遺

みょうおういんけいだい
明王院境内 （太田市安養寺町）

明王院境内

明王院は、二町四方（一辺約200㍍）の規模を有した惣領家クラスの安養寺館跡に建てられた寺です。呑嶺山明王院安養寺といいます。不動堂には、二体の不動明王が納められており、その一つは一寸八分（約5.5㌢）の白金製で、元弘３年（1333）、新田義貞の鎌倉攻めの際、山伏に化身して越後方面の新田一族に一夜にして触れまわったと伝えられ、「新田触不動」として知られています。

境内地から出土した板碑に「康永元年壬午六月五日前刑部卿源　義助生年四十二逝去」と刻まれ、新田義貞の弟脇屋義助の供養塔婆であることがわかります。境内には、安養寺十二坊のひとつである薬師坊に祀られていた南北朝期の石仏である薬師如来坐像もあります。

安養寺館跡は、土塁・堀割は現状では見られませんが、安政３年（1856）の安養寺村絵図や昭和の地籍図には堀割が確認できます。昭和63年上武道路安養寺森西遺跡の発掘調査に伴って、堀の一部が確認され、堀の形や遺物から、14世紀のものと考えられています。居住者は、死後に「安養寺殿」と諡された新田義貞説が有力です。

いくしなじんじゃけいだい
生品神社境内（太田市新田市野井町）

元弘3年（1333）5月8日、新田義貞が後醍醐天皇の綸旨を受けて、鎌倉幕府を滅ぼすための兵を挙げたところです。「太平記」には「五月八日ノ卯刻ニ、生品明神ノ御前ニテ旗ヲ挙、」（巻第十）と記載されています。神社に集まった軍勢は150騎に過ぎませんでしたが、兵を進めるに従い数を増やしていきました。

神社境内は、昭和9年に「生品神社境内 新田義貞挙兵伝説地」として国史跡に指定され、再び平成12年に「新田荘遺跡 生品神社境内」として、面積を広げて指定されました。境内には義貞が旗を挙げたと伝えられる「旗挙塚」や出陣の儀式を行ったと伝えられる「床几塚」があり、神社拝殿の前には義貞が軍旗を掲げたと伝えられるくぬぎの木が保存されています。

現在、毎年5月8日に「鏑矢祭」が行なわれます。これは、義貞が旗挙げの際に鎌倉に向かって矢を放ったという故事にならったもので、鎌倉に向かって矢を放つ行事です。古くから氏子などにより行なわれた「流鏑馬」という行事が、明治時代の中ごろ、鏑矢祭にかわったと伝えられています。

生品神社境内

鏑矢祭

跡　その2

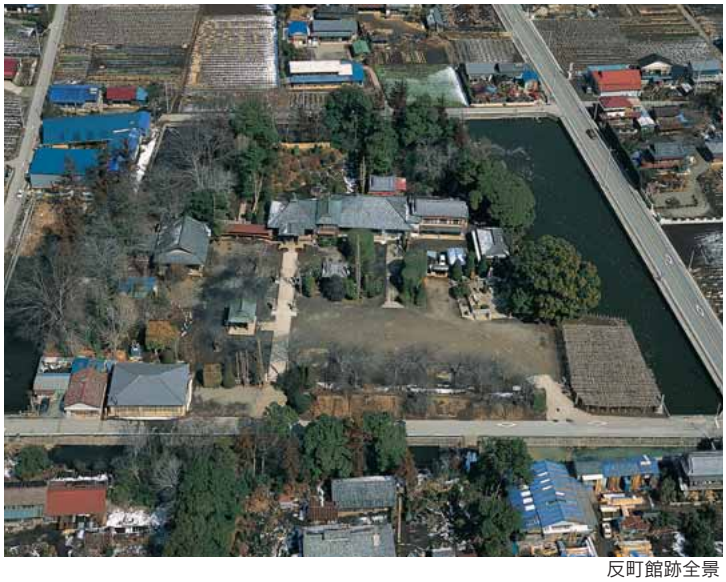
そりまちやかたあと
反町館跡（太田市新田反町町）

新田荘を代表する館跡です。昭和33年県史跡に指定されましたが、平成12年に新田荘遺跡として国史跡に指定されました。平面形は凸字型で、東西方向は南辺で138m、北辺で75mあり、南北方向は115mあります。周囲には常時水をたたえる堀が巡らされています。東側の堀の北半部は県道改修の際に二倍以上の幅に広げられています。堀の内側の三方には土塁が残っています。

築造年代は不明ですが、鎌倉時代から南北朝時代ころの築造と推定されています。その後、室町時代に金山城の支城となり、戦国時代になって三重の堀を巡らす城郭に拡張されたと推定されています。

「生品村郷土誌」などには、新田義貞が館を築き、その後大館氏明が住んだと書かれています。しかし、義貞のような守護クラスの館は通常一辺200mと広い規模を持つことから、ここに義貞が住んだということには否定的な意見もあります。

現在、館跡は照明寺の境内となっており、毎年1月4日の縁日には大勢の参詣人でにぎわいます。照明寺本堂の裏には、義貞が軍議を開いた時に、鳴いている蛙の声を静めたという伝承を持つ「不鳴の池」があります。


反町館跡全景

江田館跡（えだやかたあと）（太田市新田上江田町）

江田館跡全景

木崎台地の西端部に立地しています。新田荘を代表する館跡で、昭和22年に県史跡第１号として指定されましたが、平成12年に新田荘遺跡として国史跡に指定されました。

堀之内と呼ばれる部分は、東西約80m、南北約100mの方形で、堀がほぼ全周し、この内側には土塁が巡らされています。南辺と東辺の二ヵ所では堀が切れ、虎口（こぐち）が造られています。堀の東辺と西辺には、「折れ」があります。周囲には黒沢屋敷、毛呂屋敷、柿沼屋敷と呼ばれる曲輪（くるわ）があり、戦国時代に城郭化されたと推定されます。

築造年を示す史料はありませんが、反町館跡と同様、鎌倉時代から南北朝時代の築造と推定されています。鎌倉攻めに従軍した江田行義（えだゆきよし）の館であったと伝えられ、その後戦国時代には金山城主横瀬氏（よこぜ）の家来矢内四郎左衛門（やないしろうざえもん）が館を拡張して住んだと伝えられています。北側の土塁には、「義貞様（ぎていさま）」と呼ばれるお宮があります。

この時代の平城は通常堀が埋められたり、中に建物が入ったりして形が変えられてしまいますが、江田館跡はほぼ築造された当時の姿をとどめている貴重な館跡です。

新田荘遺

重殿水源（じゅうどのすいげん）（太田市新田市野井町）

重殿水源近景（南から）

現状では、周囲を民家や工場に囲まれ、四方を石垣とコンクリートで護岸された東西10m、南北23mの小さな池になっています。北西の角には３基の石のほこらがあります。この東側には、一級河川大川の源流であることを示す標柱が立てられています。

元亨（げんこう）２年（1322）の「関東裁許状（さいきょじょう）」によると、新田氏一族の大館宗氏（おおだてむねうじ）と岩松政経（いわまつまさつね）が「一井郷沼水（いちのいごうしょうすい）」から流れ出た「用水堀」を巡って争いを起こしたことに対して、鎌倉幕府が判決を下したことがわかります。この古文書の内容は、「岩松政経の所領である田嶋郷は古くから一井（市野井）郷の沼水を受けて耕作していたが、一井郷の領主である大館宗氏が一井郷から流れる用水をふさいでしまったため、岩松政経が鎌倉幕府にこれを訴え、幕府は用水を元通りにするよう判決を下した」というものです。この「一井郷沼水」が重殿水源であると考えられます。

新田荘は豊富な湧水に恵まれ、荘園を経営するために湧水が利用されたと考えられています。重殿水源は、こういったことを証明する史跡です。

矢太神水源（太田市新田大根町）

新田地区は大間々扇状地の扇端部に立地していることから、標高60mの地点を中心として多くの湧水地が見られます。矢太神水源は、これらの中でも最も豊富な水量を誇っており、石田川の源となっています。

北側に湧水点があり、この南側には東西15m、南北80mの沼があります。湧水点では砂を舞い上げる自噴現象を観察することができます。周囲には縄文時代の遺跡も多く見られ、数千年前から水が湧いていたことが推測されます。この地点には「ニホンカワモズク」という、貴重な紅藻類が生息しています。現在水源の東側は矢太神ホタルの里公園として整備されています。

仁安3年（1168）の「新田義重置文」は、「空閑の郷十九郷」を頼王御前（世良田義季）の母に譲ることが書かれた古文書で、新田荘が開発された様子を知ることができます。ここには「上江田・下江田・田中・小角・出塚・粕川・多古宇（高尾）」などの郷名が書かれています。これらの郷は石田川水系に立地しており、新田荘の開発に石田川が利用されたことがわかります。

矢太神水源（南から）

跡　その3

■資料館・記念館

新田荘歴史資料館
（太田市世良田町）

市域に残る数々の文化財を保存・公開するための施設で、昭和60年に開館した東毛歴史資料館を平成21年4月太田市に移管したものです。隣接する長楽寺や東照宮の貴重な文化財をはじめ、市域の歴史資料の数々が、テーマ別に展示されています。

開館時間　9:30～17:00
休館日　月曜日（休日の場合は翌日）・年末年始
入館料　一般200円　中学生以下無料
問い合わせ　0276-52-2215

縁切寺満徳寺遺跡公園
（縁切寺満徳寺資料館）（太田市徳川町）

満徳寺は、徳川義季（新田義重の子）の娘浄念尼が開いた尼寺で、江戸時代には鎌倉の東慶寺と並んで、日本でふたつの縁切寺でした。県の史跡に指定され、本堂・駆込門・庭園等が復元され、隣接して資料館があります。

開館時間　9:30～17:00
休園日　月曜日（休日の場合は翌日）・年末年始
入園料　一般200円　中学生以下無料
問い合わせ　0276-52-2276

高山彦九郎記念館
（太田市細谷町）

高山彦九郎は、江戸時代中期に活躍した当地出身の尊王思想家で、幕末の志士達に影響を与え明治維新を導きました。この記念館は、高山彦九郎宅跡附遺髪塚（国史跡）に隣接して平成8年に開館しています。

開館時間　9:30～17:00
休園日　月曜日（休日の場合は翌日）・年末年始
入園料　一般100円　中学生以下無料
問い合わせ　0276-32-5632

新田荘ゆかりの文化財

金山城跡大手虎口

金山城跡（太田市金山町ほか）

金山城は、文明元年（1469）に新田氏一族の岩松家純によって築かれ、その後、下剋上により、城主が横瀬氏（後の由良氏）に変わりました。天正18年（1590）に廃城となりましたが、難攻不落の山城として知られます。現在、総合的な発掘調査と復元整備が進められています。国指定史跡。

由良氏五輪塔・新田義貞公供養塔

金龍寺（太田市金山町）

金山城主横瀬氏（由良氏）の菩提寺。境内には、横瀬国繁から由良成繁に至る歴代の金山城主の五輪塔や新田義貞の供養塔（いずれも市重要文化財）があり、本堂には新田義貞の木造が安置されています。

曹源寺〈さざえ堂〉（太田市東今泉町）

新田氏の祖新田義重が、養姫の祥寿姫の菩提を弔うため、文治3年（1187）に祥寿院を建立、のち横瀬氏によって再興され、曹源寺と改められました。現在の本堂（県重要文化財）は、寛政5年（1793）に建てられ、さざえの貝殻に似たらせん構造をもつため、さざえ堂と呼ばれています。

正法寺（太田市脇屋町）

延喜年間（901～923）の開山といわれ、その後、新田義重が堂塔を改修したと伝えられます。脇屋氏の菩提寺で、境内には脇屋義助（新田義貞の弟）の遺髪塚があります。聖観音像（県重要文化財）や仁王門・仁王尊（市重要文化財）が有名です。

二体地蔵塚古墳（太田市世良田町）

元弘3年（1333）、鎌倉幕府は西国の乱を鎮めるため、兵を派遣することになり、その戦費を臨時税として取り立てました。特に世良田は裕福な者が多いとして、出雲介親連と黒沼彦四郎が乗り込み、5日の内に6万貫を差し出せと要求しました。新田義貞は、法に過ぎた仕打ちであると怒り、彦四郎の首を切って、ここに晒したといわれています。

伝新田義重の墓（太田市徳川町）

新田義重の子義季は、新田荘内の徳川・世良田などを譲られ、徳川に館を造り、徳川氏を称したといわれます。義重夫妻は、特に義季を愛し、この館において晩年を送り、没後は館内に葬られたといわれています。

新田義重の墓と伝えられる宝塔（市重要文化財）は、天神山凝灰岩製で、相輪は欠損していますが、現存高110㌢です。下部より古瀬戸四耳壺が出土しています。

青蓮寺（太田市岩松町）

この地はもと、岩松氏の一町四方（一辺約100㍍）の館跡で、北側に堀と土塁が残っています。青蓮寺は、源義国（新田義重の父）の創建と伝えられ、義国の子孫で金山城主だった岩松尚純がここに隠遁しました。江戸時代初期に東の字泉岡（岩松尚純夫妻の墓の南側）から現在地に移りました。本堂に祀られている日限地蔵は、現在でも信仰が続いています。

岩松尚純夫妻の墓（太田市岩松町・市史跡）

岩松尚純は、明応3年（1494）に金山城主になりましたが、家臣横瀬氏（のちの由良氏）との抗争に敗れ、家督を夜叉王丸（昌純）に譲り、岩松の地に隠遁しました。戦国武将の座を捨てた尚純は、静喜庵と号し連歌の世界に生きました。連歌師宗長は、尚純を訪ねて数日滞在し、「両吟百韻」を詠じたと「東路の津登」にあり、親交の深かったことがわかります。

岩松八幡宮（太田市岩松町）

新田義重が、京都大番のおり山城（京都）国石清水八幡宮に参詣した時、松の実を拾い持ち帰り、この地に蒔いたところ松の木が生えたので、犬間郷と呼ばれていたのを岩松郷と改め、八幡宮を建てたといいます。戦国時代には、金山城主岩松尚純の子夜叉王丸が、代々の慣例により、八幡宮で元服し、昌純と名乗ったと記録にあります。

大慶寺（太田市新田大根町）

14世紀に、足利の鶏足寺から空覚上人を迎えて建立されたと伝えられています。また、新田義重の娘が出家して妙満尼となって寺を創建したという伝承もありますが、周辺に土塁が残ることなどから、かつて新田氏一族の綿打氏の館であったところに寺が造られたと考えられています。

旧常楽寺「石塔群」（太田市新田木崎町）

常楽寺は、明治25年に蓮蔵寺、円通寺と合併して、太田市上田島町に移転し、墓地だけがこの場所に残されました。墓地には年号が刻まれた石塔群が多く残されています。石塔は宝篋印塔3基と五輪塔3基で、これらの内4基に北朝の年号が刻まれています（年号は1344年～1359年）。市重要文化財。

「新田荘」は、平安時代末期の12世紀中頃に成立した新田氏の荘園です。太田市を中心とした範囲には、かつて日本の中世史を代表する荘園「新田荘」が存在し、ここを本拠に新田氏一族が活躍を繰り広げていました。この荘園の遺跡は、現在も数多く残っています。

平成12年11月１日、それらの中の代表的な遺跡が「新田荘遺跡」として国の史跡に指定されました。この史跡は、「新田荘」に関連する寺社境内・館跡・湧水地など、市内に存在する11の遺跡から構成されています。

この史跡の特徴は、広域に存在する複数の中世遺跡を荘園遺跡として面的にとらえ、１つの史跡としたところにあります。こうしたケースは全国的にも珍しく、大阪府泉佐野市日根荘遺跡（平成10年12月８日指定）に次いで２例目となります。

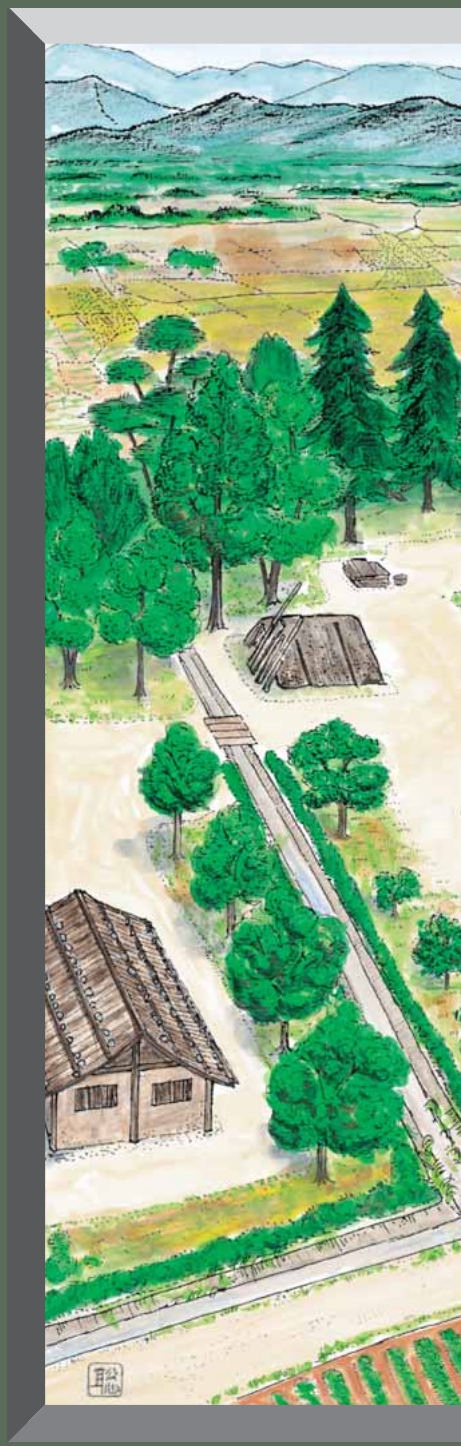
■史跡「新田荘遺跡」を構成する各遺跡

	遺跡地	所在地
1	円福寺境内	太田市別所町
2	十二所神社境内	太田市別所町
3	総持寺境内	太田市世良田町
4	長楽寺境内	太田市世良田町
5	東照宮境内	太田市世良田町
6	明王院境内	太田市安養寺町
7	生品神社境内	太田市新田市野井町
8	反町館跡	太田市新田反町町
9	江田館跡	太田市新田上江田町
10	重殿水源	太田市新田市野井町
11	矢太神水源	太田市新田大根町

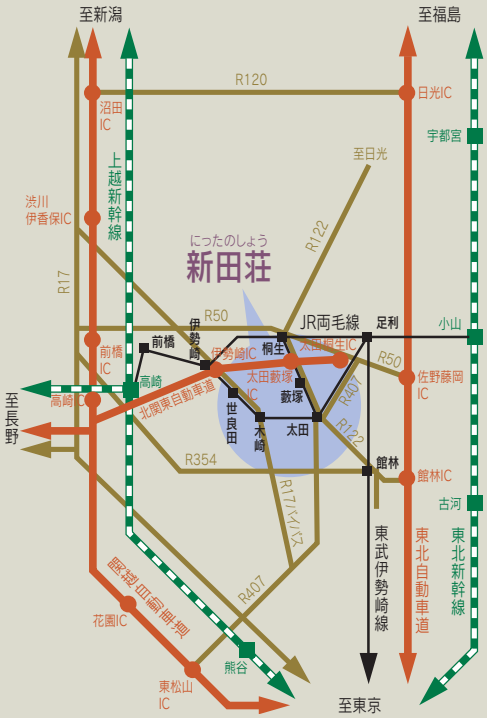
新田荘の有力農民の屋敷▶
（想定図／飯塚　聡）

15世紀頃の有力農民（在家）の屋敷を、太田市新田上江田町東田遺跡で検出された遺構に基づいて当時の景観を想定復元しました。屋敷は１辺40mほどの堀と垣根で囲まれ、庭をはさんで、大型の母屋１棟、大型の副屋1棟、倉庫２棟、(納屋１棟)、下人の居所１棟、竪穴建物２棟、井戸５基が整然と並んでいました。屋敷の出入り口は、東と南に設けられています。この屋敷は、14世紀前半から15世紀前半まで続き、廃絶されました。

※本図の初出は『よみがえる中世〈5〉』(平凡社1989)。なお、本掲載にあたっては、作者が原画に新たに彩色を施した。



■新田荘へのアクセス



史跡 新田荘遺跡パンフレット
平成21年度版

■発行／問い合わせ先
太田市教育委員会　文化財課
TEL.0276-20-7090
群馬県太田市粕川町520